

第 48 回九州英語教育学会宮崎研究大会  
KASELE 2019 Miyazaki



主 催：九州英語教育学会（KASELE）

後 援：宮崎県教育委員会  
宮崎市教育委員会

協 賛：リアリーイングリッシュ株式会社、(株)三省堂、  
株式会社エル・インターフェース、カシオ計算機(株)、  
(株)新興出版社啓林館、株式会社教育測定研究所、  
NHK エデュケーショナル、株式会社啓隆社、  
株式会社ひつじ書房、オックスフォード大学出版局

日 時：2019年12月7日（土）9:40～17:00

会 場：宮崎公立大学（宮崎市船塚1丁目1-2）

九州英語教育学会会長：柳井 智彦（大分大学）

大会実行委員長：竹野 茂（宮崎公立大学）

※ 日 程 (Schedule)

時間	内容		場所
9:00～ 9:40	受付	Reception	研究講義棟 2 階
9:40～ 9:55	開会行事	Opening Ceremony	103 号 教室
10:00～10:30	研究発表 1	Presentations 1	201 号, 301 号 教室
10:35～11:05	研究発表 2	Presentations 2	201 号, 202 号, 301 号, 302 号 教室
11:10～11:40	研究発表 3	Presentations 3	201 号, 202 号, 301 号, 302 号 教室
11:45～12:15	研究発表 4	Presentations 4	201 号, 202 号, 301 号, 302 号 教室
12:15～13:15	昼食	Lunch Break	学生食堂(場所のみ)、7 階交流スペース、屋外
13:15～13:45	研究発表 5	Presentations 5	201 号, 202 号, 301 号 教室
13:50～14:20	研究発表 6	Presentations 6	201 号, 202 号, 302 号 教室
14:30～14:50	総会	Members' Meeting	103 号 教室
15:00～16:50	授業フォーラム	Forum	101 号 教室
16:50～17:00	閉会行事	Closing Ceremony	101 号 教室
18:00～20:00	懇親会	After-Conference Party	ラ・ディッシュ大橋店

※協賛展示会場は、多目的教室 (2 階、202 号教室の奥側)

## プログラム

受付 (Reception) 9:00~

開会行事 (Opening Ceremony) 103号 教室 9:40~9:55

会長挨拶：柳井 智彦 (大分大学教授)

会場校挨拶：有馬 晋作 (宮崎公立大学学長)

研究発表 (Presentations) 10:00~12:15

・発表 20分, 質疑応答 10分 (20 min. Presentation & 10 min. Q&A)

・使用言語 E: 英語, J: 日本語 (Language used in the presentations, E: English, J: Japanese)

第一会場 (Presentation Room 1) 201号 教室

1 10:00~10:30 J

日本における大学英語入試問題は変わったか

深澤 真 (琉球大学)

2 10:35~11:05 E

Language Needs for Exchange Study Abroad: A Qualitative Study

Maiko Berger (立命館アジア太平洋大学)

3 11:10~11:40 J

言語技術を日本語と英語で学ぶ試み

松本 祐子 (宮崎公立大学)

4 11:45~12:15 J

サイトトランスレーションにおける語用論的処理に関する一考察

南津 佳広 (大阪電気通信大学)

第二会場 (Presentation Room 2) 202号 教室

1 10:00~10:30

空き

2 10:35~11:05 J

日本人大学生における英語絵本読み聞かせの効果に関する脳科学的検証

大下 晴美 (大分大学)

3 11:10~11:40 E

Pros and Cons for Creating an Extensive Reading Program at a National University in Japan

Monica Hamciuc (鹿児島大学)

4 11:45~12:15 J

語彙サイズの異なる英語学習者の心内辞書構造の相違

折田 充 (熊本大学)

村里 泰昭 (熊本大学)

小林 景 (慶應義塾大学)

吉井 誠 (熊本県立大学)

Richard Lavin (熊本県立大学)

相澤 一美 (東京電機大学)

神本 忠光 (熊本学園大学)

第三会場 (Presentation Room 3) 301号 教室

1 10:00~10:30 J

CLIL型指導によるSDGs英語プレゼンテーション能力と汎用的技能の向上

岡田 美鈴 (宇部工業高等専門学校)

2 10:35~11:05 J  
プレゼンテーション学習におけるメタ認知による学びの一考察  
—高等学校新学習指導要領英語編に基づいて—  
長友 隆志 (宮崎県立都城西高等学校)

3 11:10~11:40 J  
スピーキング不安を低減させる授業実践：ペアトークとグループプレゼンテーション  
石原 知英 (鹿児島大学)

4 11:45~12:15 J  
制限時間の設定は発話開始を早めるか：絵の描写困難度との関連  
柳井 智彦 (大分大学)

#### 第四会場 (Presentation Room 4) 302号 教室

1 10:00~10:30  
空き

2 10:35~11:05 J  
英語学習動機づけに及ぼす英語教師の親近性行動と教師への信頼性の効果—高校生を中心に—  
渡辺 正隆 (専修大学玉名高等学校)

3 11:10~11:40 J  
文法知識の体系的学修を目的とする文法に特化したクラスでの「対話的で深い学び」を実現する活動と  
その効果～意味順の力も借りて  
小林 啓子 (立命館アジア太平洋大学)

4 11:45~12:15 E  
Avatars in the Classroom: Promoting Understanding of the Active Learning Process Through  
Gamification  
Jason Adachi (宮崎国際大学)

#### 昼食 (Lunch Break)

12:15~13:15

#### 研究発表 (Presentations)

13:15~14:45

#### 第一会場 (Presentation Room 1) 201号 教室

5 13:15~13:45 J  
複式学級における小学校外国語科一年間指導計画作成の取り組み—  
東 仁美 (聖学院大学)

6 13:50~14:20 J  
英語を専門としない小学校教員を対象とした英語アウトプット力向上研修プログラムの開発  
立川 研一 (大分大学教職大学院)

#### 第二会場 (Presentation Room 2) 202号 教室

5 13:15~13:45 J  
日本の中学校における英語教科書のコロケーション分析  
武末 俊光 (熊本県立大学大学院生)

6 13:50~14:20 J  
日本人高校生を対象とした英語論証文指導の検証  
坂口 寛子 (福岡県立香住丘高等学校)

#### 第三会場 (Presentation Room 3) 301号 教室

5 13:15~13:45 E  
TBLT (Task-Based Language Teaching) from an Assessment Perspective  
Yuji Nakamura (慶應義塾大学)  
Adam Murray (琉球大学)

6 13:50~14:20  
空き

第四会場 (Presentation Room 4) 302号 教室

5 13:15~13:45  
空き

6 13:50~14:20 E  
History classes using English with an ALT

Junichi Okubora (長崎市立大浦中学校)

総会 (Members' Meeting)	103号 教室	14:30-14:50
授業フォーラム(Symposium)	101号 教室	15:00-16:50
閉会行事 (Closing Ceremony)	101号 教室	16:50-17:00
懇親会 (After-Conference Party)	ラ・ディッシュ大橋店	18:00-20:00

※ 研究発表概要 (Abstracts of Presentations)

研究発表 1 (Presentations 1)		10:00~10:30
第 1 会場 (Room 1) 201号	日本における大学英語入試問題は変わったか	深澤 真 (琉球大学)
	本研究は、国公立・私立大学合わせて 20 校の大学英語入試問題を(1)読解問題の難易度、(2) テスト問題の種類、(3)測られている技能の観点から分析を行い、これまでの研究結果と比較することで、過去 20 年間で大学入試がどのように変化してきたか明らかにすることを目的とする。主な結果として、(1)読解問題の難易度は難化傾向である、(2)reading/writing 問題では多肢選択式が私立大学で一貫して増加している、translation 問題では国公立大学で日本語から英語へ訳す問題が減少傾向にある、listening 問題では多肢選択式が一貫して増加傾向にある、(3)技能の観点からの分析では、receptive な技能を問う問題は一貫して増加傾向にある一方、productive な技能を問う問題は減少傾向にあることなどがわかった。	
第 2 会場 (Room 2) 202号	空き	
第 3 会場 (Room 3) 301号	CLIL 型指導による SDGs 英語プレゼンテーション能力と汎用的技能の向上	岡田 美鈴 (宇部工業高等専門学校)
	近年、長らく言われてきた言語における 4 技能のみならず、汎用的能力、いわゆるジェネリックスキルの育成が各教科においても求められるようになってきた。ジェネリックスキルとは、コミュニケーションスキル、合意形成、情報収集・活用・発信力、課題発見、論理的思考力の 5 つを指すとされている。本発表は、SDGs (Sustainable Development Goals) をテーマに、ジェネリックスキルを活用させながらその上に目標言語である英語をのせていくといった CLIL 型指導について、ある学年の 2 年間にわたる実践を紹介し、学生の英語プレゼンテーション能力と人間力の向上について報告するものである。	
第 4 会場 (Room 4) 302号	空き	

研究発表 2 (Presentations 2)		10:35～11:05
第 1 会場 (Room 1) 201 号	Language Needs for Exchange Study Abroad: A Qualitative Study	Maiko Berger (立命館アジア太平洋大学)
	<p>This presentation reports on a longitudinal qualitative study undertaken to investigate the language needs of three Japanese students during stays abroad. The participants had low English competencies upon entering the university, but studied hard for two years to prepare for their stay abroad programs. The researcher collected their language data over two years and interviewed the participants before and during study abroad programs to understand their needs as a learner of English as a foreign language. In terms of findings, it was evident that the determination to go abroad and the strong mentality to develop as independent learners have contributed greatly in achieving high English test scores and other competencies. These traits also help in academic endeavors abroad. As this is an on-going study, while findings remain weak, the data will provide a deep insight into the life of current university students working to succeed in their academic studies. It will eventually illustrate good practices in preparing the low-English level students for longer sojourn abroad.</p>	
第 2 会場 (Room 2) 202 号	日本人大学生における英語絵本読み聞かせの効果に関する脳科学的検証	大下 晴美 (大分大学)
	<p>本研究の目的は、NIRS (近赤外線分光法) を用いて、脳活性状態を調査することにより、日本人大学生に対する英語絵本の読み聞かせの効果を検証することである。参加者は、右利きの英語専攻でない大学生 20 名で、日本語の絵本と英語の絵本の読み聞かせをそれぞれ約 1 分間聞いてもらい、前頭前野の脳血流量の変化の比較検証を行った。その結果、言語の違いにより、読み聞かせ聴取時の脳血流量の変化に差が見られた。本発表では、この結果、および視線追跡装置を用いた視線の動向などの検証を交えながら、脳科学的見地からの英語絵本の読み聞かせの効果について考察する。</p>	
第 3 会場 (Room 3) 301 号	プレゼンテーション学習におけるメタ認知による学びの一考察—高等学校新学習指導要領英語編に基づいて—	長友 隆志 (宮崎県立都城西高等学校)
	<p>高等学校新学習指導要領が令和 4 年度から年次進行で実施される。本研究では、新学習指導要領英語編の中の目標の 1 つである「英語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的、自立的に英語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。」を達成するために、英語プレゼンテーションを英語学習の実践例とし、実践研究を行った。実践中は、生徒のメタ認知に着目し、生徒がどのように英語学習と向き合い、学習を深めるのかについて、質的研究である M-GTA を用いて分析、考察を行った。2 回のプレゼンテーション発表を通し、生徒は、聞き手をより意識しながら、英語学習に取り組む傾向があることが観察できた。</p>	
第 4 会場 (Room 4) 302 号	英語学習動機づけに及ぼす英語教師の親近性行動と教師への信頼性の効果—高校生を中心に—	渡辺 正隆 (専修大学玉名高等学校)
	<p>本研究は高校生 (381 名) の英語授業に焦点を当て、①高校生が認識する英語教師の親近性・信頼性、および②英語学習動機づけに影響を及ぼす英語教師の親近性・信頼性について検証した。その結果、教師の親近性は「寄り添う姿勢」「表層的な積極性」「英語を使った授業」、教師への信頼性は「誠実な人柄」「英語運用能力」「英語知識力」で構成されることがわかった。また、英語学習動機づけに影響を及ぼす教師の親近性は「寄り添う姿勢」、信頼性は「誠実な人柄」であった。しかし、教師の親近性に含まれる「表層的な積極性」という教師の独善的な指導はマイナス影響を与えることが示された。さらに、教師の英語力は英語学習動機づけに影響を及ぼさないことが明らかになった。</p>	

研究発表 3 (Presentations 3)		11:10~11:40
第 1 会場 (Room 1) 201 号	言語技術を日本語と英語で学ぶ試み	松本 祐子 (宮崎公立大学)
	<p>言語技術とは Language arts の訳語で「思考と表現の方法論を具体的スキルとして指導する総合的体系」(三森,2015)である。欧米諸国では修辞学の基礎と併せ言語(母語)教育の根幹としてカリキュラムに組み込まれている。本研究は言語技術をまず日本語で学習し、それを英語学習に応用するという大学の授業の試みについてまとめた。1つの言語技術を2回の授業で学習し、事前事後テストを1項目ごとに実施して学習成果を日英両語で検証した。また、学期末に質問紙調査を行い、言語技術の学習者評価とその理由について分析した。これらのデータ分析に基づき、今後の言語の言語技術指導の可能性と課題について議論する。</p>	
第 2 会場 (Room 2) 202 号	Pros and Cons for Creating an Extensive Reading Program at a National University in Japan	Monica Hamciuc (鹿児島大学)
	<p>According to an OECD report (2010), reading frequency and interest in reading for pleasure in one's native tongue begin to drop in childhood and continue to drop as children become young adults. Therefore, it is not too surprising to find out that while research has long suggested that extensive reading can have great benefits for the language development of foreign language learners, very few schools are introducing or promoting extensive reading as part of their curricula. English language education in Japan begins in elementary school and, for about half of the population, it continues through college, but when asked, a majority of college freshmen will say they have never read a book in English. This presentation reflects on the merits and demerits of introducing an extensive reading component into the English language curriculum at a national university in Japan based on quantitative and qualitative data after one semester of extensive reading. The numbers show an increase in the reading speed and reading comprehension level of the participants while the survey data offers insights into why the students (and teachers) may not be enjoying the full benefits of extensive reading.</p>	
第 3 会場 (Room 3) 301 号	スピーキング不安を低減させる授業実践：ペアトークとグループプレゼンテーション	石原 知英 (鹿児島大学)
	<p>本発表では、2019年度前期に開講した大学1年生を対象とする英語科目におけるスピーキングの指導について報告する。本実践では、学習者のスピーキング不安を低減させ、より積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を目指して、41名の学習者を対象に、ペアによる即興の会話活動(SPM, Sentence per minute)とグループ内でのプレゼンテーション活動を取り入れた授業を行った。先行研究の知見を踏まえた質問紙調査の結果、学習者のスピーキング不安は、「ピア・教師からの評価に対する不安」、「自分の能力不足」、「コミュニケーション回避」という3因子によって構成されていると捉えることができた。また、これらの3つの因子はいずれも、本授業実践の前後で低減しているようであった。</p>	
第 4 会場 (Room 4) 302 号	文法知識の体系的学修を目的とする文法に特化したクラスでの「対話的で深い学び」を実現する活動とその効果～意味順の力も借りて	小林 啓子 (立命館アジア太平洋大学)
	<p>学習者間の対話は課題解決の有効な方法であるが、有効な対話を実現するには、対話者間で、つまり、学生間で共有できる判断基準や知識のソースが必要である。筆者が実施した文法の授業では、このソースを築くことは「授業ごとに順次推移する」文法項目の学びだけでは困難であった。しかし、「セメスター期間を貫いて常時提示され活用される」文構造の学びが文法項目とともに展開されることで、徐々に学習者間で共有できる文法の判断基準や知識のソースができていった。結果、ドリルやリスニングや英作文などでの課題解決にあたって、ペア間での対話が活発になりセルフチェックや一定のメタ認知も進み、より適切な、徐々に複雑な英文を書くという効果につながった。本稿では、この授業で田地野(2014, 2015)の意味順マップに基づく表を用いたことも報告する。</p>	

研究発表 4 (Presentations 4)		11:45~12:15
第 1 会場 (Room 1) 201 号	サイトトランスレーションにおける語用論的処理に関する一考察	南津 佳広 (大阪電気通信大学)
	<p>サイトトランスレーション (サイトラ) とは、他者のスピード管理下での漸増的に理解を促し、的確に訳すための通訳訓練での橋渡し訓練である。日本ではこの 30 年でサイトラが言語教育でも脚光を浴びつつある。ところが、理解のための技術的な話や言語の線状性に基づいた訳し方に関するが中心となっている。そのため、未だに指導のスタイルの域を出ず、サイトラを導入することで読解スピードが速まり、理解が深まったなどの議論はなされていない。そこで、本発表では、サイトラの意義を再確認し、学部の英語クラスにて (CEFR A2 レベル)、理論に基づいて、他者のスピード管理下で推論を促し、意図を理解して訳すまでの実践を報告する。</p>	
第 2 会場 (Room 2) 202 号	語彙サイズの異なる英語学習者の心内辞書構造の相違	折田 充 (熊本大学) 村里 泰昭 (熊本大学) 小林 景 (慶應義塾大学) 吉井 誠 (熊本県立大学) Richard Lavin (熊本県立大学) 相澤 一美 (東京電機大学) 神本 忠光 (熊本学園大学)
	<p>本研究は、語彙サイズの異なる英語学習者は英語心内辞書 (ML) 構造も異なるのか、また ML 内の英単語の結びつき方に質的な違いがあるのかを解明することを目的とする。そのために、WordNet(Princeton University, 2012)に基づき選定した 6 語の語彙項目から構成される 4 つのクラスター(COLLEGE, SUN, DISEASE, EXPERIENCE)について、各クラスター内でつづりや発音が類似する 1 語を差し替え (例: college→courage, 合計 4 語)、実験語 24 語を選び、語彙サイズの有意に異なる 2 つの被験者群 (各 30 名) に単語仕分け課題を課した。結果から、両群の ML 構造には有意な差異があることが明らかになった。また、4 語のうち、両群とも高頻度な son では同じように構造化されたが、他の 3 語(courage, confession, utterance)では異なった。語彙サイズは ML 内の単語の結びつき方にも関係が深いことが判明した。</p>	
第 3 会場 (Room 3) 301 号	制限時間の設定は発話開始を早めるか：絵の描写困難度との関連	柳井 智彦 (大分大学)
	<p>絵を見てその状況を 1 文で描写する課題は資格試験で使われる。そのさい応答に時間制限を設けること (「絵を見てから 6 秒以内に言い終えること」など) は発話の開始を早めるであろうか。先行研究では一般に早まる (Damian &amp; Dumay, 2006 など)。しかし、それはどのような種類 (難易度) の絵を描写するかということも影響する (Yanai, 2019)。今回発表する実験では、制限時間の長短や描写する絵の難易度は、発話開始の早さに顕著な影響を及ぼすことはなかった。その原因の一つとして、授業中に与えた絵描写訓練が考えられる。その訓練の意義についても議論する。</p>	
第 4 会場 (Room 4) 302 号	Avatars in the Classroom: Promoting Understanding of the Active Learning Process Through Gamification	Jason Adachi (宮崎国際大学)
	<p>This presentation describes a long-term CLIL class project that reinforces awareness of study behaviors that may influence the understanding and retention of course concepts and vocabulary. The project turns the learning process into a game in which student teams curate the knowledge accumulated by their team's avatar, an imaginary student that is participating in the class alongside them.</p> <p>Using a simplified version of cognitive psychology's model of short and long-term memory, the teams shuffle bits of information into different categories of their avatar's body of acquired knowledge. Some of this information is transient and subject to removal. More firmly internalized material is shifted to long-term memory and becomes safe from mishap. Over the course of gameplay, specific actions, events, and random occurrences help or hinder the learning process and serve as tangible examples of how various factors affect retention.</p> <p>In the gamification of the learning process, the project seeks to take advantage of the human impulse to be a "backseat driver." By "teaching" the avatar and making critical judgements about what must be done to help the avatar to succeed, students gain insight into their own learning processes.</p>	



研究発表 5 (Presentations 5)		13:15~13:45
第 1 会場 (Room 1) 201 号	複式学級における小学校外国語科 一年間指導計画作成の取り組み	東 仁美 (聖学院大学)
	<p>小規模校・へき地校での複式学級では、2020 年に教科化となる小学校高学年外国語科をどのように実施していくべきか、大きな課題を抱えている。発表者は 2018 年度、全国 9 校の複式学級で外国語活動の実施状況を調査した。高学年の複式学級では、他教科は複式教育を実施していても、外国語活動だけは学年別指導を行っている学校が多かった。単式ではより少ない人数での授業実施になるため、言語活動の展開において課題が散見された。</p> <p>このように課題を踏まえて、発表者は検定教科書の単元配列を元に高学年複式学級での年間指導計画作成を試みてきた。発表では、同単元一本案の授業計画を基本とした高学年外国語の複式教育を提案したい。</p>	
第 2 会場 (Room 2) 202 号	日本の中学校における英語教科書のコロケーション分析	武末 俊光 (熊本県立大学大学院生)
	<p>本研究では、日本の英語教科書で使用されている語彙をコロケーションの観点から検証した研究が少ない現状を踏まえ、特に、日本の中学校における英語教科書をコロケーションの観点から分析・検証し、その使用状況、使用頻度等を明らかにすることを目的とする。</p> <p>動詞を中心とした単語の組み合わせを分析対象として検証した結果、コロケーションは全体の 2 割以下であり、その内訳は、動詞+名詞、動詞+前置詞の上位 2 種類が 8 割以上を占めた。</p> <p>使用頻度に関して、1~2 回のコロケーションが全体の 8 割以上を占める一方、10 回以上も一部見受けられた。</p> <p>教科書間の比較では、全ての教科書 (6 社) に共通するコロケーションは全体の 5% 以下であった。</p>	
第 3 会場 (Room 3) 301 号	TBLT (Task-Based Language Teaching) from an Assessment Perspective	Yuji Nakamura (慶應義塾大学) Adam Murray (琉球大学)
	<p>Tasks in TBLT (Task-Based Language Teaching) do not occur in isolation. They are mediated by the teachers and students (Ellis, 2018). Tasks have different phases such as comprehension or production. They also include assessment. Because teaching and testing are the two sides of the same coin, we need to consider both sides. This paper mainly focuses on assessment in the classroom context, an aspect of TBLT instruction which has received less attention.</p> <p>Since TBLT tasks are composed of production tasks (speaking and writing) and comprehension tasks (reading and listening), the TBLT assessment should be implemented accordingly. In other words, the students should not be solely evaluated on the performance of a single task (summative assessment), but on multiple or similar types of tasks (formative assessment).</p> <p><b>References</b>            Ellis, R. (2018). <i>Reflections on task-based language teaching</i>. Bristol, UK: Multilingual Matters.            Long, M., &amp; Norris, J. (2000). Task-based teaching and assessment. In M. Byram (Ed.), <i>Encyclopedia of language teaching</i> (pp.597-603). London, UK: Routledge.            Matsumura, M.(2017). <i>Task-based instruction of English as a second language: Principles and practices of TBLT</i>[Tasuku Betsu no Eigo Shido]. Tokyo, Japan: Taishukan.            Skehan, P. (2018). <i>Second language task-based performance: Theory, research, assessment</i>. New York, NY: Routledge.</p>	
第 4 会場 (Room 4) 302 号	空き	

研究発表 6 (Presentations 6)		13:50~14:20
<b>第 1 会場</b> (Room 1) <b>201 号</b>	<b>英語を専門としない小学校教員を対象とした英語アウトプット力向上研修プログラムの開発</b>	<b>立川 研一 (大分大学教職大学院)</b>
	<p>小学校外国語科では、教師と児童が即興的にコミュニケーションを行う言語活動の実施が求められている。しかし小学校教諭の多くは、養成段階で外国語教育に関する単位を取得していないためその指導に自信を持っていない者も多い。</p> <p>本研究では、英会話における、「何を言っているかわからない」「どう言っているかわからない」という困りを解決し、小学校教諭の英語による即興的なアウトプット力を高めるため、マインドマップを用いて発話内容を整理させたり、それを英語の語順で考え発話したりする研修内容を考案する。研修試案は実際に小学校の教員に体験して頂き、発話量や発話内容がどのように変化したか記録し、分析する。</p>	
<b>第 2 会場</b> (Room 2) <b>202 号</b>	<b>日本人高校生を対象とした英語論証文指導の検証</b>	<b>坂口 寛子 (福岡県立香住丘高等学校)</b>
	<p>高等学校新学習指導要領においては、多様な観点から考察した結果を、論理性に注意しながら理由や根拠とともに伝える能力が、これまで以上に重視されている。また、新設科目「論理・表現」では、読み手を説得する論証文作成の段階的指導が求められている。しかしながら、論証文を書くためには、自分の意見と他者の意見の類似点や相違点の分析、理由や根拠の妥当性を示すための具体例の列挙とその分類、論理構成や展開への工夫等、様々な力が求められる。本発表では、高校 2 年生を対象とした英語論証文指導について報告したいと考える。</p>	
<b>第 3 会場</b> (Room 3) <b>301 号</b>	<b>空き</b>	
<b>第 4 会場</b> (Room 4) <b>302 号</b>	<b>History classes using English with an ALT</b>	<b>Junichi Okubora (長崎市立大浦中学校)</b>
	<p>Japan's Ministry of Education suggests the English ability of Japanese should aim to be the best in Asia. Unfortunately, it's impossible to achieve such a level. With the exception of native English speaking countries and ex-British colonial nations, the English abilities of not only European nations but also other Asian nations remain higher than that of Japan's students.</p> <p>For example, almost all students in European nations have an advantage in learning English, because their native languages are similar to English linguistically. Students in China and South Korea are also learning at a higher level of English than Japanese students. Moreover, there is no opportunity or need to use English in Japan. Such a situation is concerning to Japan's national interest.</p> <p>Japan needs to give motivation and curiosity to study English to its students to improve their English abilities. We must encourage students to acquire the ability of basic English conversation and to keep on studying English. It's more effective to read and listen to historical topics in English after their learning historical topics in Japanese.</p> <p>Of course, it's impossible to improve only in class. We also need to provide educational materials on the internet for home study outside of class.</p> <p>This presentation suggests a method of using English in history class.</p>	

## ※ 授業フォーラム概要 (Abstract of Forum)

101号教室	テーマ：『主体的・対話的で深い学び』を実現する指導法を考える」 発表者（授業者）： 高田 実里（熊本大学教育学部附属小学校） 吉永 早紀子（中津市立中津中学校） 石橋 俊（佐賀県立小城高等学校） コーディネーター： 麻生 雄治（宮崎公立大学）
	[概要] 新学習指導要領（平成29年7月）において、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）を推進することが求められている。学習指導要領ではいくつかの留意点が示されているものの具体的にはどのような授業を意図しているか見えにくい。単なる活動だけでは、「活動あって学びなし」の授業になってしまう。そこで本授業フォーラムでは日常の小学校、中学校、高等学校における授業実践の一部を実際の授業スタイルで紹介する。それぞれの授業実践をふまえて、「主体的・対話的で深い学び」のある授業とはどのようなものかを考え、より効果的に実践（実現）する指導法をフロアからの質疑を交えて議論したい。

## ※ 参加費

参加費：会 員 無 料

The registration fee is free for members.

非会員 500円（資料代として）

The registration fee for non-members is 500 yen.

## ※ お知らせ・お願い (To participants)

- ・キャンパス内は敷地内全面禁煙です。お煙草はご遠慮ください。
- ・事前に弁当および懇親会を予約された方には、受付時に引換券をお渡しします。  
なお、弁当の引き換えは受付（2階）にて行います。
- ・昼食場所は食堂（スペースのみ）、7階学習交流スペース、屋外をご利用ください。  
※当日は、大学食堂は開いていません。（付近にコンビニあり）。

## ※ 会場へのアクセス (Access)

徒歩：JR 宮崎駅から約25分

乗用車（タクシー）：JR 宮崎駅から約5分

電車：宮崎空港→JR 宮崎空港線乗車→JR 宮崎駅下車→徒歩、バス、タクシー等

\*宮児タクシー：☎0985-24-5003

宮交タクシー：☎0985-22-4141

## 【お問い合わせ (Inquiry)】

九州英語教育学会事務局 麻生 雄治 (Yuji ASO, Office Coordinator)

〒880-8520 宮崎県宮崎市船塚1丁目1-2 宮崎公立大学人文学部

TEL 0985-20-4855 Email [yujiaso@gmail.com](mailto:yujiaso@gmail.com)

# 教室配置図

